

「気づき」の共有の大切さ (慶應義塾大学と協働による小型端末機を活用した利用者の状況把握等)

社会福祉法人 こうほうえん

住所／TEL	鳥取県境港市誠道町2083 / 0859-24-3111	
URL／E-mail	http://www.kohoen.jp /	
経営理念	<p>【理念】 「わたくしたちは、地域に開かれた、地域に愛される、地域に信頼される『こうほうえん』を目指します」</p> <p>【基本方針】 「わたくしたちは、サービス業のプロとして、正しい情報を伝達し、自分が受けたい保健、医療、福祉サービスの提供、改善に努めます」</p>	
事業内容	<p>介護老人福祉施設（557名）8ヶ所、介護老人保健施設（230名）3ヶ所 ケアハウス（280名）5ヶ所、（内特定施設入居者生活介護（67名）3ヶ所） 高齢者向け優良賃貸住宅（162名）2ヶ所（内特定施設入居者生活介護（88名） 高齢者専用賃貸住宅（20名）2ヶ所、短期入所生活介護（103名）8ヶ所 通所介護（346名）13ヶ所、通所リハビリテーション（194名）5ヶ所 認知症対応型通所介護（60名）5ヶ所、小規模多機能型居宅介護6ヶ所 認知症対応型共同生活介護（135名）9ヶ所、訪問介護5ヶ所、訪問看護4ヶ所 訪問リハビリテーション1ヶ所、居宅介護支援6ヶ所、福祉用具貸与1ヶ所 福祉用具販売1ヶ所、保育（550名）5ヶ所、夜間対応型保育所（75名）2ヶ所、 リハビリテーション病院（48床）1ヶ所、児童デイサービス1ヶ所、 障害者就労継続支援施設1ヶ所、在宅療養支援診療所1ヶ所。給食事業</p>	
収入 (法人全体) 平成23年度決算	①社会福祉事業事業 ②公益事業 ③収益事業 合計	9,360,801,075円 1,574,837,546円 750,086,720円 11,685,725,341円
従業員数 (法人全体)	2,004名（非常勤含む）	
当面する経営課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域包括ケア体制の構築 ・ 利用者満足向上に向けた強みの構築 高品質ケアの提供 マニュアルに遵守したケアの提供 ・ 人財の確保 ・ 充実した人生へのアプローチ 	

<p>発表する取組みに着手した理由、背景</p>	<p>ご利用者により良いサービスを提供する為には、「介護の質の向上」は不可欠である。</p> <p>しかし、それは介護者の成熟度により大きく異なる。熟練介護士と経験の浅い介護士との違いはどこにあるのか。具体的に成熟度を評価するにはどうしたらよいか等の課題がある。</p> <p>慶応義塾大学との協働した活動では、目的を</p> <ol style="list-style-type: none"> ① データに基づく自己評価や他の介助者との議論による自身の特徴把握と介護内容の改善 ② 現場で研修効果が得られることによる教育研修に関する負担の軽減としており上記課題点の改善が期待できる。
<p>発表する取組みの現時点での効果</p>	<p>自分のデータと他スタッフのデータを比較し、客観的に見ることができ、様々な視点があることにも、気が付いた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己表現の少ない重介護の方への関わりが意識して多く持てるようになった。 ・ベテランスタッフと新人スタッフの気づきの差異から、成熟度の評価値が明らかになり、OJTに活用できるようになった。 ・これらの共有によりさらに気づきが増え、ケアの質が上がりチーム力アップにも繋がった。

気づきの共有の大切さ

～慶応義塾大学事業を通じて～
IT等を活用した医療・介護周辺サービス産
業創出調査事業

社会福祉法人 こうほうえん
介護老人福祉施設 よなご幸朋苑
介護福祉士 長谷川めぐみ

施設紹介

介護老人福祉施設 よなご幸朋苑

- ・平成5年従来型特養として開設 個室20室
- ・平成18年11月全室個室ユニット施設に改修
- ・平成19年10月よりユニットリーダー研修実地施設
- ・入居定員74名
- ・平均年齢 86.5歳
- ・平均介護度 4.2 H24.9月現在
- ・短期入居生活介護（ショートステイ）
 - ・定員10名

はじめに

平成22年度・23年度と慶応義塾大学の「小型端末を使用し介護現場の質向上を図るための研究」に協働し活動を行ってきた。介護現場においては、介護者の成熟度によるサービス提供の差はいがめない。利用者に、より良いサービスを提供するためには「介護の質の向上」は不可欠である。この研究協働から、ITを活用して可視化による熟練介護士と経験の浅い介護士との違い、気づきを共有しながら、成熟度を評価する尺度を得つつあるので、その過程を報告する。

研究目的

- 1) データに基づく自己評価や他の介護者との議論による自身の特徴把握と介護内容の改善
- 2) 現場で研修効果を得られることによる、教育研修に関する負担の軽減

実験期間

平成22年度

- ・ 1か月間小型端末を使用し、データのを行う。
- ・ 最後にフィードバックを実施。

平成23年度

- ・ 入力項目の修正などバージョンアップした小型端末を使用し、5か月間データのを行う。
- ・ この間、1か月ごとにフィードバックを実施

ユニット紹介

【大地ユニット】

- ・ 利用者 12名
- ・ 平均要介護度 4.5
- ・ 常勤スタッフ 5名

(各自の経験年数)

- ・ 15年・7年・2年・1年・10ヶ月
- ・ 非常勤スタッフ 1名(3ヶ月)

実験方法

携帯端末と入力項目



明確な行動が見られない状態で気になった様子を記録するための項目

利用者の状態を把握するための能動的な働きかけに関する項目

利用者の状態をより深く考察し何らかの判断に至った場合に記録する項目

利用者状態に対する「気づき」の項目

+

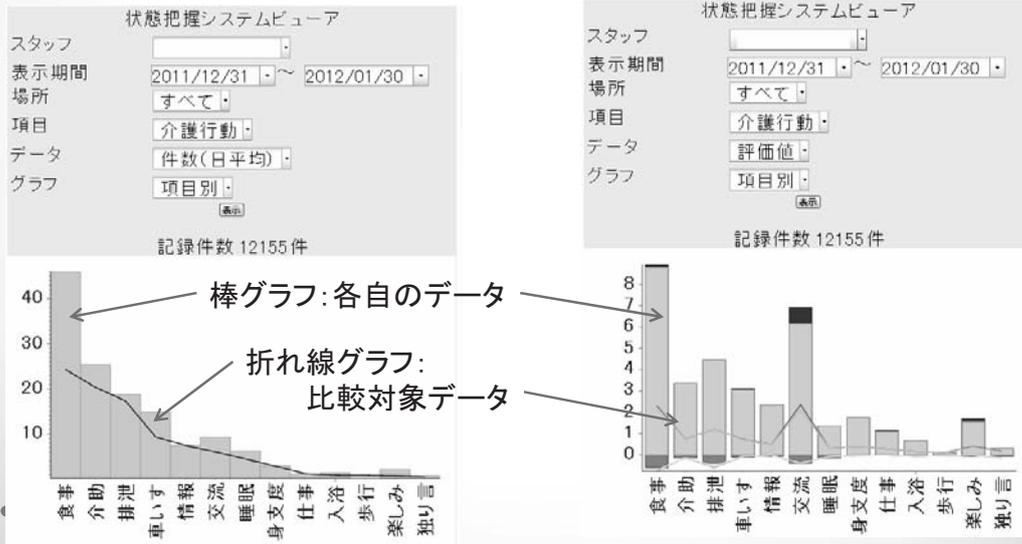
行動に関する項目

これらの項目と5段階の評価値 (-2, -1, 0, +1, +2) の組み合わせで利用者状態を随時記録

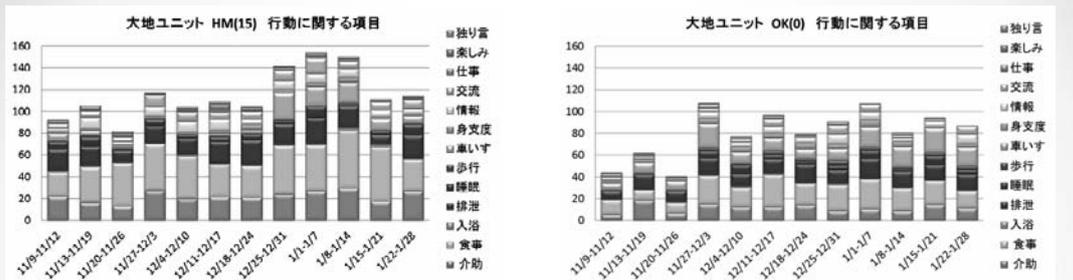
8

ビューア

- ブラウザを用い、各自のデータならびに比較対象のデータ（ユニット内平均値等）をフィードバック
- 項目ごとまたは利用者ごとの、全記録件数またはプラス・マイナスの評価値の記録件数を閲覧可能

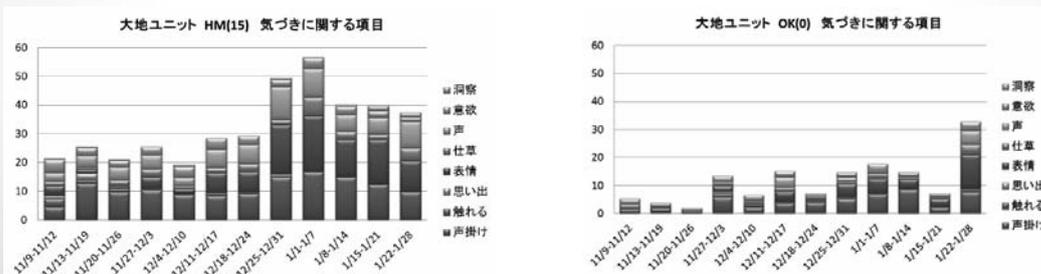


行動に関する項目の記録



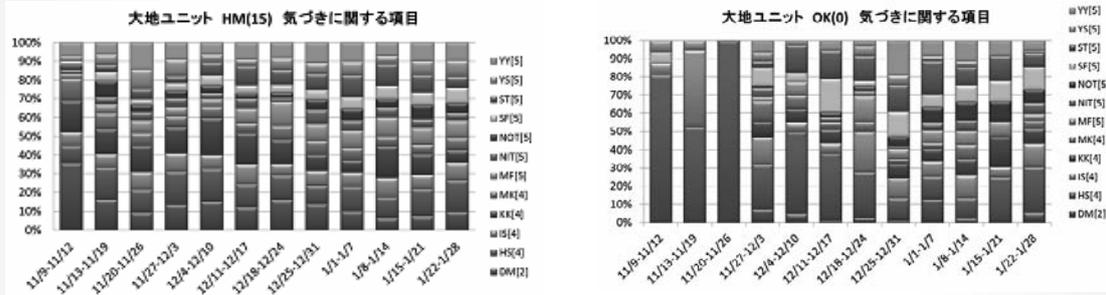
結果: 経験年数に関係なく、入力できている。

気づきに関する項目の記録



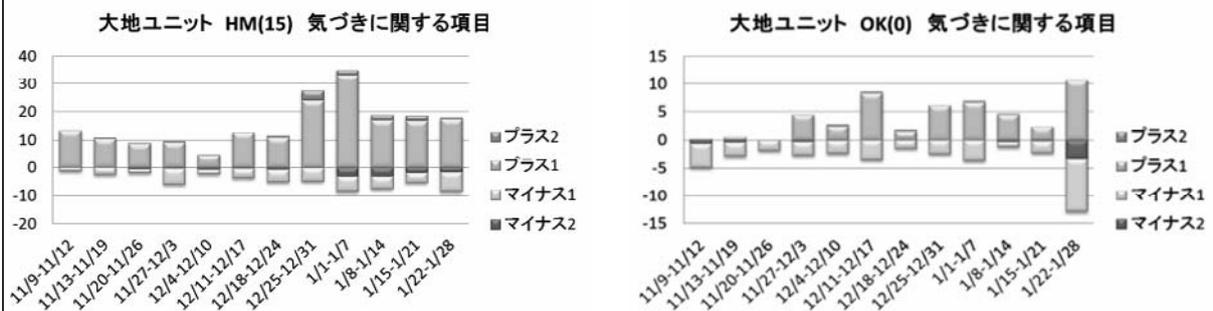
結果: 新人スタッフは、少なく、経験年数に偏りがある。

ご利用者間の記録の偏り (気づきに関する項目)



結果: 新人スタッフは、ご利用者1人の方への関わりが多く、全体が見えていない。
また、端末入力をしていても毎日記入する個人記録の自由記述の欄に記録がない。
その反面、ベテランスタッフは、端末入力と個人記録の自由記述がリンクしている事もわかった。

プラス評価とマイナス評価のバランス



結果 →
ご利用者の評価値も、ベテランスタッフの方が、気づきの項目に対してのプラスの評価が、相対的に多い事もわかった。

理由
新人スタッフは、ご利用者の不穏な状態に直面した時、如何して良いのか解らなく、マイナスと受け止めてしまいがち、その反面、ベテランスタッフは、ご利用者の状態をよく知り、不穏の状態の対処も解り、そこから、新たに良い一面を見つけようとする為、プラスの評価が多いと思われる。

「見える化」で得た情報からの ユニット内での『気づき』

- ①ユニット会を通して、自分のケアを客観的に見る
ことにより傾向、癖が分かり、ケアの振り返りが
できた。
- ②他のスタッフと比較し、競争心、向上心を引き
出せた。
- ③ご利用者の表情を以前より、気にするよう
になった。
- ④1人の気づきから、皆の気づきになり、ケアの質
が上がった。
- ⑤全ての端末のデータ量、個人記録の自由記述も増
えた。

考察

- ・自分のデータと他スタッフのデータを
比較し、客観的に見ることができ、さま
ざまな視点があることにも気が付いた。
- ・関わりの少ない利用者に対しては、今ま
でより関わりをもつようになった。

これらの共有によりさらに気づきが増え、
ケアの質が上がりチームカアアップにも繋
がった。

まとめ

【成果】

- 『気づき』の共有の場の必要性を理解することができた。
- ベテランスタッフと新人スタッフの気づきの差異から、成熟度の評価値が明らかになり、OJTを行う際のツールとして活用できることが確認できた。
- スタッフ一人、一人のケアの質が向上したことから、ユニット全体のケアの質の向上がみられた。

【今後の課題】

- データにおける職員間の差異をより容易に気づかせるための仕組みづくり
- データにより得られた気づきから「介護の質の向上」に繋げるための方法の検討